

昭和 55 年度

紅花に関する調査資料

昭和 56 年 2 月

山形県農林水産部

園芸特産課



まえがき

紅花の原産地は、一般に地中海沿岸であるとされ、シルクロードを経て、我が国に伝来したといわれている。

本県ではいつ頃から栽培されたか明確な記録はないが、西暦1620年代(寛永)頃から同1860年代(幕末期)まで、「最上紅花」として、村山地方における農業の商品作物の中心として、重要な位置を占めてきた。

その後、明治初期の産業政策と、中国紅花、印度紅花の輸入及び化学染料の圧迫により、全滅の危機に類した。

戦後、山形県を代表する花として、その保存と、復興を図る運動がおこり、昭和46年には、化粧品メーカーとの契約栽培等もあったことから、36haまで栽培面積が拡大された。しかし、その後は、化学染料の圧迫があり、再び減少の一途をたどっている。

近年、紅花色素の見なおしや、健康食品としての期待、及び切り花としての需要があり、紅花の魅力が話題にされている。

このため、主に近年における紅花の需給動向と、農業経営の一部門として成立する可能性について調査結果をとりまとめた。

本資料を作成するにあたり、紅花研究家の今田信一氏の著書及び関係者各位の御協力を得たことに厚く感謝の意を表する。

昭和56年2月2日

山形県農林水産部

園芸特産課長 中山 誠一郎

目 次

第 1	最上紅花栽培衰退の原因	1
第 2	近年における紅花の生産と販売	5
第 3	紅花の収益性	9
第 4	紅花の輸入状況	12
第 5	紅花の価値	16
第 6	用途別栽培成立要件	19
	1. 色素用紅花	19
	2. 種子及び油生産用紅花	24
	3. 切花用紅花	25
第 7	調査結果のまとめ	28
第 8	今後の紅花産業の成立の条件	29
資 料	31